T3M2

冬期講習

解答

Ｚ会東大進学教室

慶大文学部小論文

1章

【添削課題】

出典…慶應義塾大学・文・97年

解答

設問Ⅰ

人間は、地理的空間にとどまらず、世界・社会を局所と全域という二つの水準で捉え、自らの存在を全域の内部の局所として認知している。局所的なリアリティとは、個々の身体を基準として具体的に経験・了解されたものであり、他者とは共有できない。それに対して、全域的なリアリティは、個人を超越し、複数の不特定な他者と共有して、経験・了解可能である。しかしそれは、局所的リアリティとは異なり、直接経験することはできず、想像的な経験・了解にすぎない。それにもかかわらず、全域的リアリティは、局所的リアリティより、安定性を人間に感じさせる。それは、全域的リアリティが、社会性・伝達可能性を持つからである。

設問Ⅱ

【文章例①】

建物や道路、山や川といった物理的空間上の認識の仕組みとしてならば全域的・局所的像の関係は、ここに語られる通りであるとしても、全域的像が外在的かつ規範的に現象するとなれば、芸術や歴史といった人間の営みに対する認識については、ことはそう簡単ではない。

戦時下の生活について祖母に話を聞いたことがある。戦争末期の生活は苛烈なものであったようだが、若かった彼女は、この戦争は正しい戦であり、必ず勝つと信じ、指導者たちを恨んだことなどなかったそうだ。家を焼かれ家族や友人を失った悲しみや苦しみといった局所的リアリティは、「大東亜共栄圏建設」「神州不滅」といったスローガンによって形成された全域的リアリティの内部に位置

づけられていたのだ。私たちは、本来的であるはずの局所的リアリティにしっかり立脚し、あたかも根源的であるかのように代補する全域的リアリティを絶えず問い直す姿勢こそむしろ必要ではないかと考える。

【文章例②】

日本とアメリカの間に存在する日米安全保障条約に関する議論に関して見ると、米軍基地が存在し、その弊害に苦しんできた沖縄と本土では、熱の入り方がまるで違う。この違いを、課題文筆者の言う「二重のリアリティ」の枠組みで捉えてみたい。

沖縄を「局所」とし日本全土を「全域」とするならば、日本の歴史はまさに琉球・沖縄史という、沖縄の人々が実際に経験してきた、本土の人間とはそう容易に共有できない他者としての歴史を内包する。しかし、内包していることを「想像的に経験・了解」しようともせず、日本・日本人という、「局所」を超越した全域性を押しつけ、沖縄の人々やその歴史を排除してきた事実もある。

課題文で言及されているような、「全域的リアリティは安定性を感じさせる」「それは社会性や伝達可能性を持つから」ということは、沖縄と日本の歴史を考えてみると、どうもあてはまらないと思うのだ。

解説

設問Ⅰの説明・要約問題と**設問Ⅱ**の論述問題とは連関している（後述）。**設問Ⅰ**では、枝葉末節にこだわった課題文読解を要求するのではなく、課題文全体の構造と課題文筆者の論理の筋道を把握する「読み」が要求され、その「読み」のポイントが必ず設問文に示されている。そしてその**設問Ⅰ**を踏まえ、**設問Ⅱ**では、課題文の中で議論されていることに関して、具体例を提示しながら、四〇〇字という少ない字数の中で、自分の考えを簡潔明瞭に論じていくことが要求される。

本課題では、ハイレベルの課題文読解力とともに、少ない字数の中で自分の考えを簡潔に示していく論述力も必要である。特に、課題文の内容が十分消化できているのか試す意味もあるのだろう、「具体的な対象や事例に即して二重のリアリティについて論じる」という設問要求がなされている。こうした要求に対しては、読解不十分では的外れの論述をしかねない。そして何よりも、これらを九〇分という時間の中でこなしていかねばならないことが、君達にとっては一番つらいことだろう。あせらず冷静に課題文読解に取り組み、効率よく問題をこなしていく対応力を身につけよう。

★注意！

どのような課題文型の出題においても、設問要求を十分把握してから課題文読解に取り組むことは基本である。とりわけこの課題のように、かなり長く難解で、読解力を要する課題文が提示されている場合は、ことさらその点が重要になってくる。「全域的リアリティ」を、「局所的リアリティ」と対比させて説明することが、まず要求されている。次いで、「局所的」「全域的」という「二重のリアリティ」とはいかなるものか、芸術や歴史の領域から具体的対象や事例をあげ、自分なりに論述していくことが要求されている。そうした要求事項を見失わないように、課題文読解にとりかかること。

★課題文読解に取り組む際にチェックを入れながら読むと役立つポイント

1「全域的」「局所的」という概念について（ただし、「全域的空間」「局所的空間」ではなく、「全域的リアリティ」「局所的リアリティ」となっている点に注意しよう）。

2「局所的」「全域的」という二重のリアリティとは、どういうことを意味するのか。

●課題文の概要●

A　問題提示

・空間＝人間にとって、時間と共に、世界を了解し行為するための基本的な枠組み。

人間は常に時間と空間の中で、自らの行動を組織し、自己と他者との関係を考える。

・自然科学の知見世界を「時間」「空間」により了解することは、人間の脳の情報処理モデルの構造による。

・人類学・民俗学のある社会の建築や集落の空間的構造は、その社会の規範や社会構造、世界像、宇宙観と関係。

・地図も「社会的空間」「意味空間」を象徴的な形式で表現しているが、ここで考察することは次の二点。

①　地図が表現する「空間」が、私達が通常経験する「空間」と同じ現れ方・見え方をするものではないこと。

②　①ゆえに、地図は、厳密な意味では、私達が普通に経験している空間の「代わり」ではないこと。

B　局所的空間・全域的空間と人間の空間認知【問題①の検討】

a　世界を経験する際の「空間」

(a)　**人間が通常、世界を経験する際の「空間」……「局所的空間」**

(b)　**地図的表現が可能にする「空間」……「全域的空間」**

(a)「局所的空間」＝個々の身体を基準としてその近傍に開ける空間。

大地により支えられた自己の身体を中心に、その周囲に広がる三次元的空間。

【その特徴】(a)　身体が立つ位置や姿勢により、その向きが時々刻々変化する（＝恒常的に決まった左右・前後は存在せず）。

(b)　異なる人間間で方向性は一致せず（＝私と他者にとっての「右」は必ずしも一致せず）。

(c)　異なる人間が同じ局所的空間を同時に経験できず（＝私と他者にとっての空間は常に異なる相貌を示す）。

(b)「全域的空間」＝局所的空間がその部分として位置づけられる全体としての空間。人間はこの空間を直接見ることができないが、それにもかかわらず、この新しい次元を「全体」として見出し、「局所的空間」をその内部の「部分」として了解する。

【その特徴】(a)　空間内の特定の地点を基準として方向性は存在するが、個々の身体の位置や向きには影響されない。

(b)　(a)の特徴の結果として、この空間がもつ方向性は、複数の身体の間で常に一致。

(c)　地図のような形で表現される場合、この空間は、複数の人間の間で同一の像を持ち、またそのように表現されることなしには、人間はこの空間を見ることは不可能。

b　人間の空間認知と「局所的空間」「全域的空間」の関わり

人間の空間認知を支えるもの……「局所的空間」における世界の見え

←

だからといって、人間が全域的空間の存在を知らないということではない。局所的空間経験の連続を記憶する一方、同時にその局所的空間経験が、ある全域的空間の内部における身体の動きにより生じていることを知っている。

・例　自分の家から公園までの道筋を記憶する場合

・例　トゥアンの知見…幼い子供が風景を鳥瞰した時の眺めを想定することはまずないが、五、六歳になると、明らかに上

空から見ると風景がどのように見えるかが理解可能になる。また、子供・大人とも、ある風景が丘の反対側からどう見えるかより、飛行機の上からどう見えるか想像する方が簡単。

【これらが示唆すること】

全域的空間像を了解する能力が、人間の脳にあらかじめそなえられた生体的な空間モデルを土台にして人間の成長と共に開発される。したがって、地図的空間像を制作・了解する能力は、人間にとって普遍的・基本的能力である。

C　地図的空間像の果たす「代補」の機能

地図的空間像＝人々が日常経験する空間（＝局所的空間）の代替ではなく、経験不可能な空間の全域的像を提示（可視化）することにより、人々の空間的経験に新しい次元を付け加える。

重要な点…地図的空間像の果たす機能＝通常の空間経験とは異なる空間像を、あたかもそれが局所的空間像より根源的なものであるかのように、人間の了解と経験に代補する。

《代補機能が、地図を持つ人間・集団にもたらすもの・経験させる変容》

見知らぬ街で地図を片手に目的地まで行こうとする場合を想定

・人は、「局所的空間」の見えと「全域的空間」の像とを重ね合わせ、前者の方向性を後者の方向性と一致させ、それにより自己の振る舞いを全域的空間の中に位置づけようとする。

←

この定位がうまくいかない時…周囲の環境は疎遠なものに見える。

この定位がうまくいった時…周囲の環境の相貌は一変し、理解可能な手掛かりに満ちた場所になる。

〈人間の心理〉不安に満ち、周囲の環境はまるで霧の中にあるようで、自分自身の世界の中での位置づけも不安定。

しかし定位が成功すると、周囲の環境は「見える」ものになり、自身が立つ場所も同時に分かる＝見える場所になる。

←

重要な点…全域的空間＝人間が世界に存在する時の、存在の土台。局所的・相対的経験が位置づけられる共通の台座をなす。

D 「逆説」の意味【問題①の提示・検討】

人間が、局所的空間よりも、後から代補された全域的空間の方に経験の安定した土台を見出すこと＝逆説（パラドックス）

問題①＝この逆説の意味（＝局所的空間より、なぜ全域的空間の方に安定性を見出すのか）

地図を作ること＝環境に関する知識を記号として伝達する象徴化の形式。

地図的空間＝全域的空間＝他者とのコミュニケーションを可能にする表現であり、つねに・すでに他者の了解に対して開かれた表現である。環境に関する情報の他者との共有と伝達の可能性を内包しており、他者と共有され、他者へと伝達される「社会的」空間像。

⇦

地図的空間像のもつ社会性・伝達可能性

地図的空間像の社会性・伝達可能性を支える特異な視点＝「不在＝遍在」する視点

＝「だれのものでもなく、それゆえだれのものでもありうる」視点

＝社会の内部の特定の成員の視点（＝局所的空間を見る視点）から超越しており、その超越性ゆえに普遍的な視点たりうるということ。

←

視点の不在＝遍在により地図が表現する全域的空間は、誰のものでもなく、誰の視点に対しても開かれた空間たりえる。

問題①に対する答え＝地図的表現が人間の空間経験に導入するあの根源性（経験の安定した土台）

↓地図が可能にする空間像（全域的空間像）が超越的視点から見た空間像であることに由来する。

視点の超越性＝その視点において他者の視点と自己の視点を重ね合わせることの可能性、複数の不特定な他者との間で一つの空間像を共有することの可能性。実際には、どのような身体もこの超越的な視点をとることはできず、そこでの他者の視点との重ね合い・空間像の共有は「想像的」なものに過ぎない。

重要な点…地図＝想像的視点による空間像を、実際に目に見える形で表現すること。

↑

人々は、地図を媒介にしてこの想像的視点から見た空間の像を、実際に取りうる視点から見た像であるかのごとき経験をする。この意味で、地図的視点が人間の経験に代補する世界の全域的リアリティも、想像的・超越的。

←

全域的空間像は、それが他者と共有され、伝達可能であるが故、局所的空間像よりも根源的であるかのような相貌をもち始める。

（局所的空間像が自己の身体のみに帰属する空間像であるのに対し、「われわれ」に共有の空間像であるから。）

E 「社会」の了解・経験のあり方・様式二重のリアリティ

地図が表現する空間像（全域的空間像）が「集合表象」であり、それが人々に対して「社会的事実」として現象すること。

⇦

地図を持つことが生み出す全域的空間のあり方＝私達が「社会」を了解・経験することの一つのあり方・様式であるということ。

社会＝「局所」「全域」という二重の現れ方

◆社会の局所的経験・了解＝身体の周囲に具体的な他者や事物との関係

◆社会の全域的経験・了解＝（具体的関係を超え）そうした諸関係の積分された総体として了解

その時、（地図を見る時のように）想像的視点をとり、決して見晴らすことのできない社会を、そこから可視化される全域的な像として概念化。

社会＝私達を取り囲む環境ではあるが、その全域を直接に見ることは不可能。

「社会」という（社会科学のような社会を体系的に語ろうとする）言葉は、けっして見晴らすことのできない世界の全域的なあり方を可視化しようとする表現。

⇦

社会が可視化される時、「社会」という存在が湛えるリアリティは、個々の人間の個別的・局所的経験を超えた超越的で想像的な位相、それゆえ他者と共有・伝達可能な位相を内包している。

地図を描きそれを通じて世界を見る営み＝人間がけっして見晴らすことのできない世界の全域的あり方を可視化する一つの方法世界

の空間的あり方に関してそれを可視化し、了解し、その中に自己と他者とを位置づけようとする営み。

●答案作成へのアプローチ●

設問Ⅰ

課題文前半に、かなり整理した形で「局所的空間」「全域的空間」に関して言及されていた箇所があった。その部分も活用可能であるが、論ずべき対象はあくまでも「全域的なリアリティ」であり、それも「局所的なリアリティ」と対比する形で、という条件がついている。それ故、課題文前半部分を安易にまとめただけの記述にしないように。要するに、ここで論じられていた「リアリティ」とは何か、そしてその「リアリティ」とは課題文のどの部分に出てきているのか、という点について検討してみよう。

「リアリティ」という言葉がこの課題文で出てくるのは、課題文後半である。そこでその前後をじっくり読むと、この課題文中で言う「リアリティ」とは、「空間」「社会」「世界」を人間がどのように経験・了解したり、実感したり認知するかという「関わり方」ではないか、という点が見えてくるはずである。

なお、左記に、課題文の中で「局所的」「全域的」と対比的に言及されていた箇所を整理し、「全域的」に空間や社会を経験・了解・認知すること（＝全域的リアリティ）と、「局所的」に空間・社会を経験・了解・認知すること（＝局所的リアリティ）に関してまとめておく。ただし、これは必ずしも網羅的にまとめたものではない。あくまでも参考にとどめ、自分自身の読解した成果を、自分なりにまとめたうえで、答案作成に臨もう。

また、三〇〇字以内という少ない字数設定である点と、この**設問Ⅰ**で「局所的」「全域的」の対比関係をしっかり理解しておかないと、**設問Ⅱ**の「具体的な対象や事例に即した」論述を要求する設問に十分応えられない点も、あらかじめ考慮しておくべきだろう。課題文中に言及されていた対比事項を、全て盛り込むことは不可能であり、当然、課題文中で強調されていた対比事項をピックアップすべきだろう。

【局所的リアリティ】

(a) 自分の身体を中心にその近傍に広がるものとして空間・社会・世界を経験・認知すること。

(b) 人々が空間・社会・世界を日常的（通常的）・直接的・具体的に経験すること。

(c) 他者と同時に経験・共有・伝達が不可能であること。

(d) 個人的に（社会や空間を）経験すること。

【全域的リアリティ】

(a) 個々の身体の近傍に開ける空間がその内部に位置づけられるように認知される全体的認識。

(b) 人々が通常了解してはいても直接的・具体的に経験することができず、想像的に経験・了解すること。

(c) 他者と同時に経験・共有・伝達が可能であること。

(d) （社会や空間を）個人的経験に対して先行するもの。

設問Ⅱ

●設問要求●

① 局所的・全域的という二重のリアリティは、芸術や歴史の領域においても見出すことが可能であることを踏まえ、いずれか一方の領域を選択する。

② ①で選択した領域で、具体的な対象や事例に即して、この二重のリアリティについて論じる。

○課題文から「二重のリアリティ」の意味することを把握する

我々人間にとって、地図が表現する「空間」は、直接的・具体的に経験する「局所的空間」とは異なり、想像的な視点を設定し、直接は見晴らすことはできない「全域的空間」を可視化してくれる。要するに、人間にとっての「空間」は、「局所的空間」と「全域的空間」から成るということである。それと同様に、課題文筆者は、「社会」も「局所」と「全域」という二重の現れ方をすると言及し、これを社会的世界のもつ「二重のリアリティ」と言っている。

つまり、私達が直接接することができるもの・人物との具体的関係からも「社会」を経験するが、その具体的関係を超えて諸関

係の大きな広がりとして「社会」を経験したり、了解したりもする。その際重要なのが、その局所性・具体性を「想像的」に「超越」する視点をとることであろう。

○「二重のリアリティ」を論じやすい（見出しやすい）領域を選択する

出題者は、この「二重のリアリティ」が、社会や空間だけではなく、芸術や歴史の領域においても見出すことが可能だと考えている。それ故、いずれか一方から、自分なりに「二重のリアリティ」を説明しやすい具体的対象や事例を探しだし、実際にここで論じていかなければならない。「局所的リアリティ」「全域的リアリティ」に関して押さえた**設問Ⅰ**を活用しながら、具体例が思いつきやすい領域を選択すればよい。ここで君達の発想力が問われていると言えよう。

ただし、この「二重のリアリティ」という考え方が、必ずしも全ての対象にあてはまるわけではない。特に、出題者が設定している「歴史」「芸術」を見ていく枠組みとして、果たして妥当かどうか、批判的に考えてみることも必要である。例えば、「歴史」を考える時、「世界史」といっても、真に「全域的」（＝ある国家・民族・地域・文化に偏向しない）視点に基づいたものが成立しうるのだろうか。そうした点に言及しながら論じる形も、もちろん評価されよう。

【慶應義塾大学文学部小論文で要求されること】

① 抽象度が高く、かなり長い文章（五、六〇〇〇字前後）を読みこなすこと。
② 設問文の要求を正確に把握し、出題者側の意図を外さずに答えること。
③ 要約・説明問題（字数三〇〇字程度）に慣れておくこと。
④ 少ない字数の中で、適切かつ効果的な言葉を用いて、自分の見解を述べることに慣れておくこと。

2章

【添削課題】

出典…オリジナル問題

解答

設問Ⅰ

人間は誰しもその人なりの生き方や人生観を持つが、それと相容れない傾向は無意識下に「影」として抑圧される。人は自分の「影」を認めることをできるだけ避けるために、「影」を自分自身から切り離して、それを受けるに値する現実行動が見られる相手に重ね合わせ、その相手を「影」もろともに非難することで自己を正当化しようとするのである。「投影の機制」とはこのように責任を他者に転嫁する仕組みであるが、そこには自分自身のあるがままの姿を見つめようとする姿勢が欠落している。「影」はその人の自我の一部であるのだから、その「影」を受け入れてこそ人生の意味を深め、人間として自立し成長していくことができると筆者は考えている。

設問Ⅱ

自己と他者の関係は、自我が確立されていく過程で明確な自他の区別がなされ、互いに相手を独立した人格と認め合い、相手の中に自分の存在理由を見出すという補完関係として、社会生活の根幹を形成してきた。

しかし、過度に情報化され、また一方で自由市場が国家を越えて世界化してきた現代社会においては、均質化、平準化が急激に進んで物事の輪郭は失われ、外部は取り崩されてあらゆる事象の内部化が加速してきている。

そこで人間関係においても、節度ある距離感が失われ、一方では相手を自分の従属物であるかのように見なす異常なまでの「影の投影」が横行し、他方では逆に自分の内に閉塞して他者に対して完全に無関心であり通す、という二極化が進んでいるように思われる。

不透明で流動的な時代だからこそ、「影」などを媒介とせず、互いに信頼し高め合いながら自己実現を目指す。それこそが、人間関

係のあるべき姿だと私は思う。

解説

●設問要求●

設問Ⅰ

① 課題文を正確に読解する。

② 「投影の機制」についての筆者の考えを読みとってわかり易く説明する。

③ 三〇〇字以内でまとめる。

設問Ⅱ

① 設問Ⅰで説明した「投影の機制」についての筆者の考えを踏まえ、それと関連させる。

② 自己と他者の関係について、自分自身の考えを論述する。

③ 四〇〇字以内でまとめる。

●課題文の分析・読解●

【課題文の構造】

(1) **話題の提示（第①段落）**

人間の持つ「影」の「投影の機制」という精神現象について。

(2) **話題の分析**

(a) 人間は誰しも「影」を持つが、それを認めることをできるだけ避けようとしている。

(b) そのためにもっともよく用いられるのが「投影の機制」である。（機制＝仕組み・内部構造のこと。機構に同じ）

(c) 「投影」を受ける側は、「投影」を引き出すに値する何かを持っている。

★以下の記述の中で解明せねばならぬこと。

(a)→人間が誰でも持つという「影」とはどのようなものであるか？
(b)→「投影」とはいかなる現象、もしくは行為のことであるか？
(c)→「投影」を受ける側は、それに値するどのようなものを持っているのか？

筆者は課題文冒頭（第①段落）で話題を提示するが、そこでとり上げられている「影」、「投影の機制」といった言葉の概念は抽象的であまり馴染みがない。そこで、以下の論述の中で順次その説明がなされていくことが予想されるが、その前に自分なりにある程度のイメージを掴んでおく。

【一般的なイメージ例（読解の前提として）】

A「影」という概念について

・「影」という言葉の持つ一般的なイメージの確認→「光と影」という対立概念のうちの一方であろう。
・人は「それを認めることをできるだけ避けようと」することから、「影」とはその人間の心（内面）における「負」の部分に対する呼称であろう。

B「投影」という概念について

・Aであげた心の中の「負」の部分（弱点、負い目、コンプレックスなどが想起されよう）から逃れるために、他者に対して行われるある働きかけであろう。
　→「投影」とは「影」を投げかけるという意味に受けとれる。

C「投影」の対象者について

・「投影」をする人間とそれを受ける側の人間の関係は重要と思われる。
　→相手は誰でもよい、というわけではない。
・**設問Ⅱ**にある、自己と他者の関係との関連でとらえていく必要があろう。

(3) **「投影の機制」についての論述**

(a) **「投影の機制」（個人対個人の場合）（第②段落）**

・「投影の機制」の具体例…「虫が好かない同僚X」のケース

「同僚Xは『お金』にやかましすぎる」という非難→「お金の問題」＝自分自身の「影」の部分（認めたくない自己）である。

←

その「影」をXに「投影」→自己を直視しない態度・現実逃避

←

自ら投げかけた「影」と一体化させた形でXをひたすら攻撃→その「異常な熱心さ」と、ちらりとよぎる「不安感」は表裏一体＝「投影」を行う人間の心理状態

(b) **「個人的な影」と「普遍的な影」（第③段落）**

・「投影」を受ける側の人間には、「影」を受けるに値する現実行動がある。→同僚X＝「少しケチである」という点。＝「影」との同質性

・「個人的な影」→自分自身が認めたくない「負」の部分

＋

「普遍的な影」→現実を越えて、倫理的な価値基準に照らして裁断すべき「悪」の要因

←

相手（「影」の投影を受ける側）を絶対的な「悪」という形にして、合法的に拒否しようとする。

・「投影のひきもどし」の必要性

→相手に「投影」した「影」を、自分自身のものとしてはっきりと自覚しなければならない。

→とても勇気のいる仕事。

(c)青年期の子供による、両親への「影の投影」（第④段落）

・両親の現実のあり方が子供の「投影」を引きだす要因となる。

「思いがけぬ両親の影の発見」→子供は、それが自らの「影」を「投影」したものと気づかずに驚く。

←

子供自身の「個人的な影」に加えて、「普遍的な影」が混入し、両親を非難・批判する。

←

「投影のひきもどし」に成功することによって、子供は自立への動きを促され、人間として成長する。

・人間は成長のある段階において、「影の投影とそのひきもどし」を経験することが必要である、という筆者の考えが読みとれる。

(d)「白い影の投影」（第⑤段落）

・「影」と「白い影」の相違点

→「影」は、その人の認めたくない「負」の部分であり、それを「投影」した相手を非難するという形をとるのに対し、「白い影」とは、その人が生きてこなかった反面であり、それは必ずしも「負」や「悪」とは限らない。

・「白い影の投影」の具体例

他人に対する親切さを抑圧して生きてきた人→抑圧してきた親切＝「白い影」

←

その「白い影」を上司に「投影」する。→上司に「投影を受けるに値する現実行動（親切・やさしさ）」があることが前提。

←

「普遍的な影」をつけ加えて、現実を越えた絶対的な親切心を期待する。

←

期待どおりでない場合（ほとんど実現は不可能）、すぐに「不親切な人」だと非難する。

・「白い影の投影」は、他人に良い面を期待するようでいて、結局はその人をすぐ攻撃するという点で、一般の「影の投影」

と変わらない。

・「投影」を行う当人は、自分の「影」を背負う（自分の責任を認める）ことに、まったく無意識であるのが特徴。

★筆者の見解

個人が個人として存在する以上、誰しも心の奥底に「影」を持っているが、本人はそれを認めようとせず、その「影」を「投影」するにふさわしい相手（現実行動においてその「影」と多少なりとも共通する傾向のある者）に「影の投影」を行いがちである。相手に強い悪感情がある場合は、そこに「普遍的な影」まで「投影」して拒否してしまうこともある。自分の生きてこなかった反面を他者に「投影」する「白い影の投影」も、結果としてその相手を非難することになる点では変わりがない。そしていずれの場合も、自分の「影」を背負うということがないため、人間として自立・成長するために必要な「投影のひきもどし」はきわめて困難であり、かつ勇気のいる仕事である。

★筆者の基本姿勢

自分の「影」を自覚し受け入れる姿勢こそが、人間的に自立し成長していく過程で不可欠であり、また、他者とのよりよい人間関係もそうしたところから生まれてくると考えている。従って、何よりも自分自身のあるがままの姿（その「光」も「影」もともに）と対峙し、内省し、自己実現に向けて自らを高めていく努力こそ尊いということを述べようとしていると思われる。

(4) 「影の反逆」についての論述

(a) 集団における「影の投影」と「影の反逆」（第⑥～⑧段落）

A　集団において「影の投影」が行われる場合、集団の成員が自分自身の「影」を自覚するのはますます難しい。集団の成員がすべて同一方向、陽の当たる場所に向かって一丸となって行動→自分たちの背後にある「大きい影」に誰も気づかず。

→その「影」に気づいた者は、集団にとって危険な存在として、直ちに抹殺される。

B　このような集団の弱点は、「影の反逆」に対してまったく無防備であること。

「影の反逆」とは「極端な反転現象」。

外部から攻撃する場合
内部に突如発生する場合
がある。

←

「影」の力が強化され、集団の成員の無意識内で活動する。

意識的――集団のために努力
無意識下――言いがたい不安、仕事への熱意の低下

←

成員の中の少数の人の意識に侵入→その人は集団の中の「影」を背負う人となる。→何らかの異常性を強いられる。
＝人間の理性の及ばぬ力（抗しがたい力、自然の力、運命）の認知

(b)

個人生活における「影の反逆」（第⑨段落）

→ある個人の自我があまりに一方向にかたよった構造を持つとき、それはいつか「影の反逆」を受けねばならない。

A　オセロウの例（シェイクスピア）

・あまりに立派で、疑いを知らぬオセロウ（自らの「影」を知らぬ人物）
→ベネチアの将軍でキプロス島の総督であるムーア人（黒人）。ベネチア貴族の娘、デスデモナを妻に迎える。
・イアーゴウ（「影の主人公」）
→オセロウの部下。オセロウに出世を阻まれたことの復讐を誓う。
→この物語で、イアーゴウはオセロウの「影」と考えられる。

B　マクベスの例（シェイクスピア）

・マクベス（スコットランドの将軍）は「王になる」という妖女の予言を聞いて自我のもつ判断力を失い、「影」の力の動くままに夫人と共謀して国王を暗殺して王位を奪うが、やがて夫人は発狂して死に自らも悲劇的最期をとげる。

○シェイクスピアの悲劇は運命悲劇→個人の物語でありながら同時に、普遍的な物語でもある。

★筆者の見解

個人における自我や集団の意志があまりにも一方向にかたよった構造をもつとき、それはいつか「影の反逆」を受けることになる。その時、人間の力など到底及ばない運命（自然の力）を感じることになる。

★筆者の基本姿勢

自らの「影」を背負うという責任を果たさぬまま、社会の中で生きていくことはできない。必ずや、人間を越えた力による制裁を受けることになると考えている。

(5)「影の肩代わり」についての論述

(a)「影の反逆」と「影の肩代わり」（第⑩段落）

「影」を抑圧して生きながら、「影の反逆」をまったく受けないように見える人→周囲の人が、その「影の肩代わり」をさせられている場合が多い。

・「影の肩代わり」の例

親の「影」のない生き方――宗教者、教育者など

←

子供が「影の肩代わり」をする現象を呼び起こす力が存在――放蕩息子、犯罪者になるなど

(b)「影の肩代わり」をした子供の生き方（第⑪段落）

親の無意識的な「影」の力→子供の生き方、意識的努力に強い慣性が作用

←

・二者択一の生き方

↓親の「影」を背負わされ、それと苦闘しつつ親とはまったく逆の生き方をする。
↓親の「影」の排除に努めつつ親と同じ生き方をする。
・親の生き方の適度な修正はほとんど至難のこと。

(c)「いけにえの羊」――集団の「影の肩代わり」現象（第⑫・⑬段落）

・ナチスドイツのユダヤ人に対する仕打ち
↓為政者が集団の「影」をすべてユダヤ人（「いけにえの羊」）に押しつける。
←
集団の凝集性を高める。
集団内（民衆）の攻撃を避け、自らの正当性を主張する。
・多数のものが誰かの犠牲の上に立って、安易に幸福を手に入れる方法
↓「普遍的な影の投影」によって、ある国民やある文化が悪そのものであるかのような錯覚を抱かせる。
○このような場合も、自分の「影」を自覚するようなことは難しい。

★筆者の見解

「影の反逆」を受けていないように見える人は、周囲の人が「影の肩代わり」をしている場合が多い。また、さらに意図的に他者に「普遍的な影」まで「投影」して、相手を「いけにえの羊」に仕立て上げることがよくある。これらのことも、自分の「影」への自覚の欠如に起因するがゆえに解決は難しい。

★筆者の基本姿勢

「影の投影」はまったく無責任で自己中心的な生き方に他ならず、それが人間関係を壊し、ついには国家や民族の対立や戦争を誘発する原因となることを指摘している。筆者の姿勢としては、我々一人一人が安易に「影の投影」を行うことなく、自分の「影」を自分自身で背負って生きていく努力をするよう求めることで一貫している。

●答案作成へのアプローチ●

① 設問Ⅰについて

1 解答の手順

①課題文中で筆者が「投影の機制」について述べている箇所を的確におさえる。
②筆者の考えをわかり易く伝える文章にまとめる。
③指定字数を考慮する。

2 解答のポイント

(a) 「影」とはどういうものかは、課題文中で示されたいくつかの具体例などから読みとることができる。

(b) 「投影」とは、「空間にある物体の位置、形状を一点または無限遠点から見て、一平面上に表わす図法（広辞苑）」を言う。この場合は、人が「影」を他者に投げかけることであることを掴む。そして「影の投影」は結局、「自分の姿の投影」に他ならない。自分の無意識界が相手の存在、その言動の上にはっきりそれとわかる形で重ね合わされることである。このことも課題文の中にすべて書き尽されているわけではないので、筆者の考えに沿って補完していかなければならない。

(c) なぜ人は「影の投影」を行うのかという理由も考える。無意識下で自分の内面の否定したい志向や性状を自分から切り離し、日頃からあまり好意を抱いていない相手にそれを負託して非難することで、自分自身の心の安定を保とうとする――「影の投影」の効用はそこにある。

(d) 人は誰しも「投影の機制」と無縁ではないが、その後「影のひきもどし」ができるかどうかで、人間的成長を遂げられるか否かの決定的差異が生じるのである。

② 設問Ⅱについて

論述へのアプローチ

(a) 「自我」（アイデンティティ）とは、「私が私として意識しうること」「私の意識の統合性の中核をなすもの」と考えられる。この「自我」と「影」とが、人間の心の中に対極をなす時、必然的に「影」は「自我」の統制を離脱して外界の他者に向けて

作用する。これが「投影の機制」であることを**設問Ⅰ**で確認したはずである。こうして人は、自分自身と「影の投影」を行った相手との間に特別な人間関係を構築することになる。それは、自己の「影」を「投影」した相手の姿を通して実は自分自身を観察し、内省するきっかけとなり、「影」を「自我」の一部であることを受け入れることを促すのである。

(b) 特に筆者の意見への賛否が問われているわけではない。筆者の考えを踏まえて自分自身の考えを述べる時、どのようなアプローチの仕方があるか。自分自身で体験したことがあれば、説得力を持つ論証となりうる。

①影の投影
②白い影の投影
③影の反逆
④影の肩代わり
⑤いけにえの羊

課題文は右の五つのことについて語っているが、②〜⑤はいずれも①から派生していることに注目したい。つまり、①〜⑤のいずれを論述の材料としても、「この文章を踏まえて」という設問の条件に叶うことになろう。それに基づいて論点を立てて、独自の考えを展開するのである。

(c) 課題文自体が筆者の考えへの賛否を問う種類のものではなく、また筆者の考え自体も根源的には誰しも認めざるを得ない「人間の真実」に基づいていると思われる。そのため、どうしても筆者の考えを自分なりに検証していく形にならざるを得ないが、「自己と他者の関係」という抽象的なテーマの持つ許容度を充分に生かし、筆者の言及していないことを見つけ、自分なりの視点をとり入れて考えを導き出していくことは充分に可能である。

(d) 考えられる論点の例をいくつかあげてみよう。

①「現代社会」という枠の中で、「自己と他者の関係」はどのように位置づけられているか。日本社会の現状が抱える問題として、身の周りの事象など想起しつつ考えてみる。→比較文化論的なアプローチ

②男性と女性の相違が、「自己と他者の関係」においてどのような差異を生み出しているかを考察する。
③「影の投影」の強さの度合いから、他者との人間関係の持ち方がどのように規定されるか考えてみる。

T3M2
慶大文学部小論文

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製